

安全データシート

1. 化学品及び会社情報

化学品の名称	:	アセフェート-d ₆
SDSコード	:	Q7-10
供給者の会社名称	:	
林純薬工業株式会社		
住所	:	大阪府大阪市中央区内平野町3丁目2番12号
電話番号	:	06-6910-7305
E-mail	:	shiyaku_kikaku@hpc-j.co.jp
URL	:	https://direct.hpc-j.co.jp/
緊急連絡電話番号	:	06-6910-7305
推奨用途	:	試験研究用
使用上の制限	:	試験研究以外の用途には使用しない事。人体又は動物用の医薬品、食品、家庭用品、化粧品等には使用しない事。環境中に使用しない事。

2. 危険有害性の要約

GHS分類

物理的危険性	爆発物	区分に該当しない	
	可燃性ガス	区分に該当しない	
	エアゾール	区分に該当しない	
	酸化性ガス	区分に該当しない	
	高压ガス	区分に該当しない	
	引火性液体	区分に該当しない	
	可燃性固体	分類できない	
	自己反応性化学品	区分に該当しない	
	自然発火性液体	区分に該当しない	
	自然発火性固体	分類できない	
	自己発熱性化学品	分類できない	
	水反応可燃性化学品	区分に該当しない	
	酸化性液体	区分に該当しない	
	酸化性固体	分類できない	
	有機過氧化物	区分に該当しない	
	金属腐食性化学品	分類できない	
	鈍性化爆発物	区分に該当しない	
	健康有害性	急性毒性(経口)	区分4
		急性毒性(経皮)	区分に該当しない
		急性毒性(吸入:気体)	区分に該当しない
急性毒性(吸入:蒸気)		分類できない	
急性毒性(吸入:粉じん、ミスト)		区分に該当しない	
皮膚腐食性/刺激性		区分に該当しない	
眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性		区分に該当しない	
呼吸器感作性		分類できない	
皮膚感作性		区分に該当しない	
生殖細胞変異原性		区分に該当しない	
発がん性		区分2	

	生殖毒性	区分 1B
	特定標的臓器毒性 (単回ばく露)	区分 1 (神経系)
	特定標的臓器毒性 (反復ばく露)	区分 1 (神経系, 血液系, 呼吸器系)
	誤えん有害性	分類できない
環境有害性	水生環境有害性 短期(急性)	区分 3
	水生環境有害性 長期(慢性)	区分に該当しない
	オゾン層への有害性	分類できない

絵表示
(GHS JP)



GHS07



GHS08

- 注意喚起語 (GHS JP) : 危険
- 危険有害性 (GHS JP) : 飲み込むと有害 (H302)
 発がんのおそれの疑い (H351)
 生殖能又は胎児への悪影響のおそれ (H360)
 臓器の障害 (神経系) (H370)
 長期にわたる、又は反復ばく露による臓器の障害 (神経系、血液系、呼吸器系) (H372)
 水生生物に有害 (H402)

注意書き (GHS JP)

- 安全対策 : 使用前に取扱説明書を入手すること。(P201)
 全ての安全注意を読み理解するまで取り扱わないこと。(P202)
 粉じん/煙/ガス/ミスト/蒸気/スプレーを吸入しないこと。(P260)
 取扱い後は手、前腕および顔をよく洗うこと。(P264)
 この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。(P270)
 環境への放出を避けること。(P273)
 保護手袋/保護衣/保護眼鏡/保護面を着用すること。(P280)
- 応急措置 : 飲み込んだ場合: 気分が悪いときは医師に連絡すること。(P301+P312)
 ばく露又はばく露の懸念がある場合: 医師に連絡すること。(P308+P311)
 気分が悪いときは、医師の診察/手当てを受けること。(P314)
 口をすすぐこと。(P330)
- 保管 : 施錠して保管すること。(P405)
- 廃棄 : 内容物/容器を国際、国、都道府県又は市町村の規則に従って廃棄すること。(P501)

3. 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区別 : 化学物質

化学名又は一般名	濃度又は濃度範囲	化学式	官報公示整理番号		CAS RN
			化審法番号	安衛法番号	
アセフェート-d6	≥95%	C4H4D6N03PS	-	2-(3)-168	2109699-73-0

上記濃度又は濃度範囲は、規格値ではありません。
 上記濃度又は濃度範囲に記載の%は、個別表記があるものを除き、全て重量%となります。

4. 応急措置

応急措置

- 吸入した場合 : 空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。
 直ちに医師に診断/手当てを受けること。

- 皮膚に付着した場合 : 汚染された衣類を直ちに全て脱ぐこと。
多量の水と石鹼で優しく洗うこと。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。
- 眼に入った場合 : 眼に入った場合: 水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用してい
て容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。
- 飲み込んだ場合 : 口をすすぐこと。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。

5. 火災時の措置

- 適切な消火剤 : 周辺火災に応じて、適切な消火剤を使用する。
- 使ってはならない消火剤 : 強い水流は使用しない。
- 火災時の危険有害性分解生成物 : 火災時に刺激性もしくは有毒なフュームまたはガスを発生する。
- 消火方法 : 着火した場合、初期消火は、火元(燃焼源)を断ち、適切な消火剤を用いて一挙に
消火する。
周辺火災の場合、移動可能な容器は速やかに安全な場所に移す。
移動不可能な場合、容器及び周囲の設備等に散水し、冷却する。
- 消火時の保護具 : 消火作業の際は、空気呼吸器を含め防護服(耐熱性)を着用する。

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具および緊急時措置

- 一般的措置 : 立ち入る前に、密閉された場所を換気する。
関係者以外の立ち入りを禁止する。
直ちに、全ての方向に適切な距離を漏洩区域として隔離する。
作業の際には、吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、必ず適切な
保護具を着用し、風下で作業行わない。

環境に対する注意事項

- 環境に対する注意事項 : 環境への放出を避けること。
下水道や公共用水域への侵入を防ぐ。

封じ込め及び浄化の方法及び機材

- 浄化方法 : 粉塵を発生させないように注意し、できるだけ掃き集めて密閉できる空容器に回収
し、安全な場所に移動する。
回収跡は多量の水で洗い流す。

7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い

- 技術的対策 : 吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、適切な保護具を着用して作業
する。
漏れ、あふれ、飛散しないように取扱い、ミスト、蒸気の発生を少なくし、換気を十
分にする。
- 安全取扱注意事項 : この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。
取扱い後はよく手を洗うがいをすること。
作業所の十分な換気を確保する。
接触、吸入又は飲み込まないこと。
- 接触回避 : 長時間または反復の暴露を避ける。

保管

- 安全な保管条件 : 施設して保管すること。
直射日光を避け、換気の良い場所に保管する。容器を密閉し、火気、熱源より遠
ざげる。

安全な容器包装材料	: 遮光した気密容器。
技術的対策	: 適用法令を遵守する。
保管温度	: 冷蔵保管: 2~10℃

8. ばく露防止及び保護措置

設備対策	: 取扱場所での発生源の密閉化、または局所排気装置、全体換気装置の設置。取扱い場所の近くに安全シャワー、洗眼設備を設け、その位置を明瞭に表示する。
------	---

保護具

皮膚及び身体の保護具	: 保護服、保護長靴、保護前掛け
眼の保護具	: 保護眼鏡(普通眼鏡型、側板付き普通眼鏡型、ゴーグル型)
手の保護具	: 保護手袋
呼吸用保護具	: 防塵マスク

9. 物理的及び化学的性質

物理状態	: 固体
外観	: 固体
色	: 白色
臭い	: わずかな酸臭
pH	: データなし
融点	: データなし
凝固点	: データなし
沸点	: データなし
引火点	: データなし
自然発火点	: データなし
分解温度	: データなし
可燃性	: データなし
蒸気圧	: データなし
相対密度	: データなし
密度	: 1.2 g/cm ³ (20℃)
相対ガス密度	: データなし
溶解度	: データなし
n-オクタノール/水分分配係数(Log Pow)	: データなし
爆発限界 (vol %)	: データなし
動粘性率	: データなし
粒子特性	: データなし

10. 安定性及び反応性

反応性	: データなし
化学的安定性	: 通常の取扱い条件では安定である。
危険有害反応可能性	: データなし
避けるべき条件	: 日光、熱
混触危険物質	: データなし
危険有害な分解生成物	: 窒素酸化物、硫黄酸化物

11. 有害性情報

アセフェート	
急性毒性(経口)	【分類根拠】(1)~(10)より、区分4とした。【根拠データ】(1)ラットの LD50: 1,040 mg/kg(食安委 農薬評価書(2016))(2)ラット(雄)の LD50: 1,080 mg/kg(食安委 農薬評価書(2016))(3)ラット(雌)の LD50: 1,010 mg/kg(食安委 農薬評価書(2016))(4)ラ

アセフェート	
	ット(雄)の LD50:1,400 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)、EPA Pesticides RED (2006)) (5)ラット(雌)の LD50:1,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)、EPA Pesticides RED (2006)) (6)ラット(雄)の LD50:1,430 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (7)ラット(雄)の LD50:1,230 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (8)ラット(雄)の LD50:945 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (9)ラット(雌)の LD50:866 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (10)ラットの LD50:1,000~1,400 mg/kg の間(JMPR (2005))
急性毒性(経皮)	【分類根拠】(1)~(5)より、区分に該当しない。【根拠データ】(1)ラットの LD50:> 2,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (2)ラットの LD50:> 5,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (3)ウサギの LD50:> 2,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (4)ウサギ(雄)の LD50:> 2,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)) (5)ウサギ(雄)の LD50:> 10,000 mg/kg(食安委 農薬評価書 (2016)、EPA Pesticides RED (2006)、JMPR (2005))
急性毒性(吸入:気体)	【分類根拠】GHS の定義における固体であり、区分に該当しない。
急性毒性(吸入:蒸気)	【分類根拠】データ不足のため分類できない。
急性毒性(吸入:粉末)	【分類根拠】(1)~(3)より、区分に該当しない。【根拠データ】(1)ラットの LC50(4 時間):> 6.26 mg/L(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015)) (2)ラットの LC50(4 時間):> 14.8 mg/L(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2016)) (3)ラットの LC50(4 時間):> 15 mg/L(JMPR (2005))
急性毒性(吸入:ミスト)	データなし
皮膚腐食性/刺激性	【分類根拠】(1)、(2)より、区分に該当しない。【根拠データ】(1)ウサギ(n=6)を用いた皮膚刺激性試験(7 日観察)において、適用後 24 時間後及び 48 時間後に 1 例で軽度な紅斑が認められたが、72 時間以内にすべて回復した(紅斑・痂皮スコア:0/1/0/0/0/0、浮腫スコア:0/0/0/0/0/0)との報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2016))。(2)ウサギ(n=6)を用いた皮膚刺激性試験(GLP、4 時間適用、72 時間観察)において、適用後 1 時間後及び 24 時間後に 1 例で軽度の紅斑がみられたが、48 時間以内にすべて回復した(24/48/72h 後における 6 匹の紅斑・痂皮スコアの平均:0.2/0/0、浮腫スコアの平均:0/0/0)との報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015))。
眼に対する重篤な損傷又は刺激性	【分類根拠】(1)~(3)より、区分に該当しない。なお、新たな知見に基づき、分類結果を変更した。【根拠データ】(1)ウサギ(n=6)を用いた眼刺激性試験において、眼刺激性はみられなかった(角膜混濁スコア:0/0/0/0/0/0、虹彩炎スコア:0/0/0/0/0/0、結膜発赤スコア:0/0/0/0/0/0、結膜浮腫スコア:0/0/0/0/0/0)との報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2016))。(2)ウサギ(n=6)を用いた眼刺激性試験(GLP、7 日観察)において、眼刺激性はみられなかったとの報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015))。(3)本物質は眼刺激性物質ではない(JMPR (2005)、EPA Pesticides (2006))。
呼吸器感作性	【分類根拠】データ不足のため分類できない。
皮膚感作性	【分類根拠】(1)~(3)より、区分に該当しない。【根拠データ】(1)モルモット(n=20)を用いた Maximisation 試験(GLP、皮内投与:5%溶液)において、24、48 時間後の陽性率はともに 0%(0/20 例)で陰性であったとの報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2016))。(2)モルモット(n=20)を用いた Maximisation 試験(GLP、皮内投与:10%溶液)において、初回惹起後の陽性率は 5%(1/20 例)、7 日後の再惹起後の陽性率は 0%(0/20 例)であったとの報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015))。(3)モルモット(n=20)を用いた Buehler 試験(局所投与:35%溶液)において、24、48 時間後の陽性率はともに 0%(0/20 例)で陰性であったとの報告がある(農薬抄録 (2016))。
生殖細胞変異原性	【分類根拠】(1)~(3)より、区分に該当しない。【根拠データ】(1)In vivo では、マウスの骨髄細胞を用いた 2 つの小核試験(単回経口投与)、マウスの骨髄細胞を用いた染色体異常試験及び染色分体交換(SCE)試験(ともに単回経口投与)、サルに経口投与後採取した末梢血リンパ球を用いた染色体異常/SCE 試験(単回経口投与)、マウスを用いた優性致死試験(5 日間混餌投与)並びにスポット試験(妊娠 8~12 日、混餌投与)が実施されており、いずれも結果は陰性であった(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015)、農薬抄録 (2016))。(2)In vitro では、多くの細菌復帰突然変異試験で陰性(一部陽性)、ほ乳類培養細胞(マウスリンパ腫細胞)を用いた複数の遺伝子突然変異試験で陽性、同チャイニーズハムスター肺由来細胞(CHL)を用いた染色体異常試験並びに同チャイニーズハムスター卵巣細胞(CHO)を用いた姉妹染色分体交換試験でいずれも陽性の報告がある(食安委 農薬評価書 (2016)、農薬抄録 (2015)、農薬抄録

アセフェート	
	(2016))。(3)食品安全委員会では、本物質について、生体において問題となる遺伝毒性は認められないと結論づけられている(食安委 農薬評価書(2016))。
発がん性	【分類根拠】(1)~(4)より、区分2とした。マウスでは2試験とも肝臓腫瘍が雌にみられ、ラットでは2試験中1試験に鼻腔腫瘍が認められた。新たな情報源を追加し、分類結果を変更した。【根拠データ】(1)国内外の評価機関による既存分類結果としては、EPAのグループC(Possible Human Carcinogen)がある(EPA OPP Annual Cancer Report 2020 (Accessed July 2021):1985年分類)。(2)ラットを用いた2年間混餌投与による2つの発がん性試験のうち、最大700ppmを投与した先行試験(試験報告年:1981年)では検体投与に関連した腫瘍性病変の増加はみられなかった(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。一方、後から実施された最大1,500ppmを投与した発がん性試験(GLP、試験報告年:1999年)では500ppm以上の雌雄に、鼻腔の腫瘍(腺腫、鼻腔神経上皮腫、扁平上皮がん、横紋筋肉腫等)の発生が認められ、これら腫瘍性病変の発生は、検体投与の影響による可能性を否定できなかった(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2015))。(3)マウスを用いた18ヵ月間混餌投与による発がん性試験(GLP、試験報告年:1999年)では、最高用量の500ppm投与群の雌雄で鼻腔に腫瘍の発生が各1/50例(雄:鼻腔腺腫、雌:未分化がん)に認められた。また、500ppm投与群の雌で肝臓(肝細胞腺腫・肝細胞がん)の発生頻度の増加が認められた(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2015))。(4)マウスを用いた2年間混餌投与による発がん性試験(試験報告年:1982年)では、最高用量の1,000ppm投与群の雌で肝臓に前腫瘍性変化とされている過形成結節と肝細胞がんの発生頻度の増加が認められた(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。
生殖毒性	【分類根拠】(1)、(2)より、区分1Bとした。なお、(1)及び(2)では親動物に一般毒性影響がみられる用量であるが、着床数減少、新生児数減少、生存児数減少など重篤な生殖毒性影響がみられているため分類結果を変更した。【根拠データ】(1)ラットを用いた混餌投与による二世代生殖毒性試験(GLP)において、500ppmでP及びF1親動物に一般毒性影響(体重増加抑制、脳コリンエステラーゼ(ChE)活性阻害(>20%)、精子運動活性低下(F1雄)、着床数減少(F1雌15.6→12.0)、児動物に新生児数減少(P:13.7→12.0)／(F1:14.6→11.3)及び生存児数減少(F113.3→10.5/F214.0→10.4)、精巣下降率低下(F1雄)、脳ChE活性低下(>20%) (F2雌雄)がみられたとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2015))。(2)ラットを用いた混餌投与による三世代生殖毒性試験(GLP)において、500ppmで親動物に体重増加抑制(P雌雄、F1雄及びF2雄)及び軟便、水様便(F1雄及びF2雄)、児動物に着床数減少(F2雌14.6→11.8)、新生児数減少(F1:13.1→9.7/F2:13.2→9.9/F3:13.9→9.7)がみられたとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。【参考データ等】(3)ラットを用いた強制経口投与による2つの発生毒性試験(GLP、妊娠6~15日)において、親動物に体重増加抑制及び摂餌量減少などがみられた用量で、児動物に低体重のみがみられ、催奇形性は認められなかったとの報告がある。(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2015))。(4)ウサギを用いた強制経口投与による2つの発生毒性試験(GLP、妊娠7~19日又は妊娠6~27日)において、催奇形性は認められなかったとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2015)、農薬抄録(2016))。(5)ラットを用いた強制経口投与による発達神経毒性試験(GLP、妊娠6~哺育6日(P)、生後7~21日(F1))において、F1児動物には生後4日に乳汁経路によるChE活性阻害は認められなかったが、生後21日には最低用量の0.5mg/kg/day以上の雄児に脳ChE活性低下(>20%)、10mg/kg/dayでは雌雄児動物に赤血球ChE活性低下(>20%)が認められた。F1児動物への投与によるこれら直接影響がみられる用量でも発達神経毒性の証拠は認められなかった(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016)、JMPPR(2005))。
特定標的臓器毒性(単回ばく露)	【分類根拠】(1)~(4)より、区分1の用量範囲で神経系影響がみられることから、区分1(神経系)とした。【根拠データ】(1)ラットを用いた強制経口投与による急性神経毒性試験(GLP)において、20mg/kg以上(区分1の範囲)でうずくまり姿勢(円背位)減少、眼瞼閉鎖減少、体温低下(FOB)、尾のピンチ反応低下、緩慢な正向反射、自発運動量減少がみられ、80mg/kg(区分1の範囲)で聴覚驚愕反応低下がみられたとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。(2)別のラットを用いた強制経口投与による急性神経毒性試験(GLP)において、10mg/kg以上(区分1の範囲)で脳コリンエステラーゼ(ChE)活性阻害(20%以上)及び全身の振戦がみられ、100mg/kg以上(区分1の範囲)で赤血球ChE活性阻害(20%以上)、四肢の振戦、耳の攣縮、覚醒異常及び立ち上がり行動減少、尾部ピンチ反応及び正向反射の異常、体温低下、移動減少及び自発運動量減少、流涎(雄)、流涙(雌)等の神経系症状がみられたとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。(3)マウスを用いた単回経口

アセフェート	
	投与試験において、175 mg/kg 以上(区分 1 の範囲)で嗜眠、流涎、振戦、攣縮、流涙、呼吸困難、活動低下、運動失調等がみられ、250 mg/kg 以上(区分 1 の範囲)で死亡例がみられたとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016))。(4)別のマウスを用いた単回経口投与試験において、300 mg/kg(区分 1 の範囲)で振戦、流涎、流涙、眼瞼下垂がみられたが、死亡例は生じなかったとの報告がある食安委 農薬評価書(2016)、農薬抄録(2016)。【参考データ等】(5)ラット及びマウスを用いた複数の単回経口投与試験において、区分 2 の用量範囲で振戦、流涎、運動失調等、神経系症状がみられているとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016))。(6)成人男性 40 名及び成人女性 10 名に、本物質(原体、男性;0.35~1.25 mg/kg 体重、女性;1.0 mg/kg 体重)を単回カプセル経口投与した安全性試験において、血漿及び赤血球 ChE 活性は試験期間を通じて全投与群で投与前に対し有意な低下も散見されたが、阻害の程度は最大で 16.7%であったとの報告がある(食安委 農薬評価書(2016))。
特定標的臓器毒性(反復ばく露)	データなし
誤えん有害性	【分類根拠】データ不足のため分類できない。

12. 環境影響情報

アセフェート	
水生環境有害性 短期(急性)	甲殻類(オオミジンコ)48 時間 EC50 = 55 mg a.i./L(水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定に関する資料, 2013)であることから、区分 3 とした。情報の再検討により、旧分類から分類結果を変更した。(a.i.: active ingredient)
水生環境有害性 長期(慢性)	慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく(BIOWIN)、藻類(ムレミカヅキモ)の 72 時間 NOErC = 24 mg/L(農薬抄録, 2016、水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定に関する資料, 2013)から、区分に該当しないとなる。慢性毒性データが得られていない栄養段階(甲殻類、魚類)に対して急性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく、甲殻類(オオミジンコ)の 48 時間 EC50 = 56.7 mg/L(農薬抄録, 2016)から、区分 3 となる。以上の結果を比較し、区分 3 とした。情報の再検討により、旧分類から分類結果を変更した。
残留性・分解性	データなし
生体蓄積性	データなし
土壌中の移動性	データなし
オゾン層への有害性	データなし

13. 廃棄上の注意

- 化学品(残余廃棄物) : 都道府県知事の許可を受けた産業廃棄物処理業者に、内容を明示して処理を委託する。
- 汚染容器及び包装 : 容器の内容物を完全に除去してから廃棄する。
空容器は地域の条例に準拠してリサイクル、再利用または廃棄する必要がある。

14. 輸送上の注意

国際規制

海上輸送(IMDG)

- 国連番号(IMDG) : 非該当
正式品名(IMDG) : 非該当
容器等級(IMDG) : 非該当
輸送危険物分類(IMDG) : 非該当

航空輸送(IATA)

- 国連番号(IATA) : 非該当
正式品名(IATA) : 非該当
容器等級(IATA) : 非該当
輸送危険物分類(IATA) : 非該当

海洋汚染物質	: 非該当
国内規制	
海上規制情報	: 非該当
航空規制情報	: 非該当
特別な輸送上の注意	: 運搬に際しては、容器の転倒、損傷、落下、荷崩れ等しないように積み込み、漏出のないことを確認する。

15. 適用法令

国内法令

労働安全衛生法	: 非該当
毒物及び劇物取締法	: 非該当
消防法	: 非該当
外国為替及び外国貿易法	: 輸出貿易管理令別表第1の2項 輸出貿易管理令別表第1の16の項
化学物質排出把握管理促進法(PRTR 法)	: 第1種指定化学物質(法第2条第2項、施行令第1条別表第1) (RS)-O, S-ジメチル=アセチルホスホルアミドチオアート(別名アセフェート) (管理番号: 212) (100%)

16. その他の情報

参考文献	: 17423 の化学商品(化学工業日報社) 国際化学物質安全性カード(ICSC) 独立行政法人 製品評価技術基盤機構(NITE) ERG2020 版 緊急時応急措置指針(日本規格協会)
その他の情報	: この SDS は林純薬工業株式会社の著作物です。当該製品の化学物質製品を取り扱う事業者に対して提供するものであり、安全を保証するものではありません。現時点における該当化学物質の情報を全て検証しているわけではありません。当該化学物質について常に未知の危険性が存在するという認識で、製品運搬・開封から廃棄に至るまで、安全を最優先して使用者自己の責任においてご使用下さい。当該化学物質を使用する際は、使用者自ら安全情報を収集すると共に使用される場所・機関・国などの、法規制等については使用者自ら調査し最優先させてください。国または地方の規制についての調査は、当社としては行いかねますので、この問題については使用者の責任で処理願います。当該物質の日本語による SDS と他国言語にて翻訳された SDS が存在する場合、内容の相違があるなしに関わらず日本語で記述された文書が優先され他国言語による文書は参考文書とします。